

手洗いのポイント



・手洗いなしだとウイルスは手に付着しています。



・流水のみで15秒手洗いを行うとウイルスは約1%に減ります。



- ・ハンドソープを手に付け、10～30秒手洗いした後、流水で15秒すすぎをしたら、ウイルスは約0.01%に減ります。
- ・ハンドソープを手に付け、60秒間手洗いした後、流水で15秒すすぎをしたら、ウイルスは約0.001%に減ります。

参考文献:森功次他:感染症学雑誌、80:496-500,2006

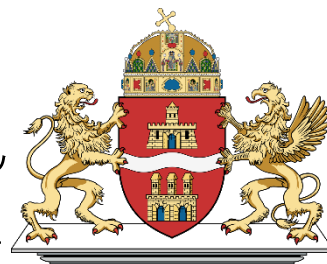
厚生労働省.<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11130500-Shokuhinanzenu/0000105095.pdf>

**ハンドソープもしくは石鹸等を用いながら十分に手洗いを行い、
コロナウイルスを予防しましょう!**

感染制御の父 ゼンメルワイスの物語

表に書いたように、コロナウイルスの感染拡大を防ぐ最も効果的な方法の一つは、手を洗うことです。しかし、感染拡大の予防のために手洗いをするというアドバイスは、いつの時代でも常識だったわけではなく、むしろ19世紀には非常識でした。

ゼンメルワイスは、1818年にブタ近郊のタバーン(現在のブタペスト:ドナウのバラと称される街です。ドナウといえば、名曲「美しき青きドナウ」で有名ですね。)で生まれました。ゼンメルワイスは19世紀半ばにウィーン大学総合病院の産科で働いていました。当時のヨーロッパでは、産院や病院での出産が増えていましたが、産後に死亡する女性が多く問題になっていました。自宅出産するよりも死亡率が高かったと言われています。死亡原因の多くは産褥熱でした。産道から細菌が入り、重い感染症となって命を落としたのです。



ブタペストの首都章

ゼンメルワイスは、出産を介助するのが医師と医学生グループが行うのと助産師が行うのとで、産褥熱による死亡率が差がある原因について考えました。そして、医師らのグループだけが死亡した患者を解剖していることに思い当たりました。解剖をした学生や医師は、そのまま手を洗わずに、出産を控えた産婦の産道の検査をしていたのでした。当時のことですから、はっきりした病原体は不明だったのですが、ゼンメルワイスは死体に付いている何か悪いものが、彼らの手で運ばれるのだらうと考えたのです。ゼンメルワイスは、産婦の処置の前に手を洗うように主張しました。手指消毒を導入してみると、劇的に産褥熱の発生率は下がり、医師らのグループが解除する群と助産師が解除する群とで死亡率の差はなくなったのです。(病原体の発見前に対処方法を見つけたのです！)



いろはかるた

い: 犬も歩けば棒に当たる

ろ: 論より証拠

は: 花より団子 となるのは、
江戸のいろはかるた。

上方(京都・大阪)は違います。

これは、感染を防止するための手指消毒の重要性を示す、大変貴重な歴史的事例です。その記録を残したゼンメルワイスの功績は後世になって認められ、「感染制御の父」と言われるようになります。しかし、存命中にはその功績はあまり評価されなかったようです。ゼンメルワイスが提唱した方法は当時の医学界に受け入れられず、むしろ彼に怒りを示したり嘲笑したりする医師さえいたそうです。1865年、ゼンメルワイスは神経衰弱に陥り、精神科病棟に入れられました。そしてここで衛兵から暴行を受けた際の傷がもとで、47歳にして膿血症で死去しました。しかし彼の死後数年を経て、ルイ・パスツールが細菌論を、ジョセフ・リスターが消毒法を確立し、ゼンメルワイスの理論は広く認められるようになりました。

「論より証拠」という諺がありますが、証拠だけではなかなか人々に理解され、行動を変容させることは難しいようです。

ゼンメルワイスについて、さらに詳しく知りたい人は

玉城英彦(著)『手洗いの疫学とゼンメルワイスの闘い』

人間と歴史社 を読んでみてください。大学図書館にあります

(498.6/Ta79)。本を読むことで、自宅に居ながら世界は広がります。

